

介護実習の視点 3

－実習後の、介護実習指導者と学生のアンケート結果から－

松 田 水 月	専攻科福祉専攻
荒 木 隆 俊	専攻科福祉専攻
櫻 井 嘉 宏	専攻科福祉専攻 非常勤講師
佐 藤 元 姿	専攻科福祉専攻 修了生

(2007年10月1日受理)

〔 要 約 〕

本稿は、前回調査した実習開始前の「介護実習の視点1」、「介護実習の視点2」で得られた結果と、実習後の変化について、実習指導者と学生の知識、技術面について、実習における認識の変化と課題を明らかにするために調査したものである。

この結果、以下の点が明らかになった。

- 1) 実習で、介護実習指導者が、特に求めることは、介護の専門職者としての基本的な知識、技術に加え、倫理、対人援助における基本的態度、疾患等、介護の現場で最低限必要とされる項目、いわゆる介護観、障害者観の習得が高い結果となっている。
- 2) 学生が実習を通し、習得したかった、学びたかった項目は、「介護保険制度の理解」、「ケアプラン」、「アセスメント」といった介護過程の展開方法に対しての値が高い結果となった。
これは、実習前の「介護保険制度の理解」などの項目が低かったことから逆転し、実習施設において、介護保険制度の重要性、それに伴った介護過程展開技術の必要性を学生自身、切実に感じてきた結果であると推測される。
- 3) 実習前と同様、実習指導者、学生双方とも、実習で習得すべき技術は、介護技術全般に対するニーズは高い結果となった。
- 4) 実習指導者は、「接遇」について重要度の高い認識を持っているのに対し、学生は、「接遇」に関する認識は、予想に反して低い結果となった。
- 5) これからますます介護の「質」が問われてくるが、教員は、もっと介護現場の実態を理解し、実習施設との連携を強化する必要が急務であり、学生への指導体系の構築が、今後の養成校の重要な課題である。

I. はじめに

本稿は、先の「介護実習の視点1－実習前の、介護実習指導者のアンケート結果から－」^(註1)及び、「介護実習の視点2－実習前の、学生のアンケート結果から－」^(註2)に続き、知識・技術を中心とした、介護実習後の意識調査を実施した結果をまとめたものである。

先の報告では、実習前に、期待する実習内容等についての介護実習指導者(以下「指導者」と略す)の調査結果から、1) 実習で学んでもらいたい知識には、利用者の要介護度が重度化する中で、QOLの維持・向上する援助に関する知識、ADLの障害への働きかけと、ADLを低下させる疾病、障害についての基本的理解が多い。2) 実習で学んでもらいたい技術には、「観察」、「接遇」、「コミュニケーション技術」が多い。

3) 介護福祉士に求められる資質には、「尊重・尊厳」の認識、「笑顔」が多い等が明らかになった。

また、本学専攻科福祉専攻に在籍する学生(以下、「学生」と略す)が実習に向けて、実習前にどのような意識をもち介護実習に臨んでいるかについて調査した結果、1) 実習を通して学びたい知識では、制度的なことに対する理解の重要性は低い傾向にある。2) 実習を通して学びたい技術では、学生の持つ「介護」イメージである、要介護者に直接触れ、関わる手技的な技術を学びたいという意識が強い。3) 学生は、介護実習を通して、即、実践に結びつく知識・技術に習得願望が強い傾向にある。4) 介護福祉士に必要な資質に、「介護技術」・「笑顔」・「向上心・研究心」・「尊重・尊厳」と考えている学生が多い等が明らかになっ

た。

そこで、本稿では、実習後において、指導者、学生双方に、実習後にどのような変化が表れているかを明らかにし、より高度な質の高い専門性を備えた介護福祉士養成という観点から、介護実習の課題を明らかに、今後の実習指導等に反映させていくものである。

II. 研究方法

〈対象〉

実習前第1回調査(2006.5)と同様の、介護実習施設17施設・機関の指導者17名、及び、学生38名を対象とした。

〈調査内容及び目的〉

実習後の知識・技術面における認識の相違、及び習得度の確認を行い、介護実習の課題を考察する。

〈調査方法〉

指導者については、アンケートの目的、倫理的配慮を記載した書面とともに、アンケート用紙を郵送し、返送回収。

学生には、同、内容事項を口頭で説明し、その場で記入、回収した。

〈実施時期〉

2006年11月(実習終了一ヶ月後)

〈分析方法〉

アンケートの各項目の適当と思われる箇所に、指示通りに回答してもらい、そのトータルを総計し比較分析し、いずれも、グラフから読み取れる結果として考察した。(アンケートについては、別添資料参照)

〈倫理的配慮〉

調査対象者には、本研究以外での目的には使用しないこと、集計されたデータは厳重に取り扱い、各個人、施設名が特定されないこと、成績、施設評価等には一切関係ないことを記載、説明し協力を依頼した。

〈回収率〉

指導者94.1% 学生100%

III. 結果と考察

1. 指導者：実習までに習得してもらいたい知識

学生：実習までに学んでおきたかった知識

図1は、指導者「実習までに習得してもらいたい知識」と、学生「実習までに学んでおきたかった知識」を比較したものである。

ここで得た結果は、指導者からすれば、実習中で習得するというものではなく、実習前に講義等や各学生が、事前学習で学んで臨むべき項目であり、学生に

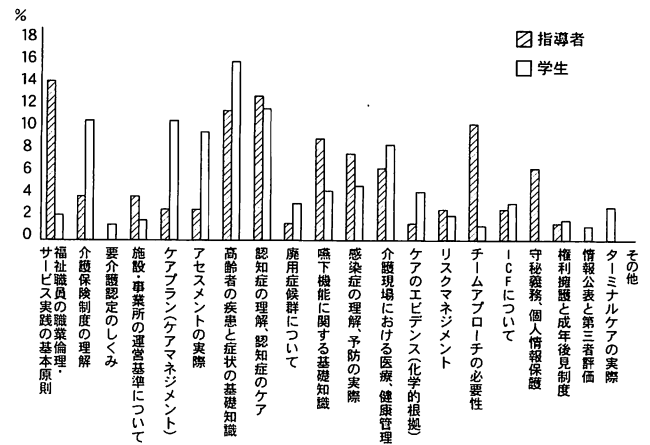


図1

としては、現場では常識的に扱われている知識であると痛感し、事前にもっと学んでいくべき項目であったと推測できる。

そこで、まず指導者・学生ともに差が少なく、回答の高い項目を抜きだしてみると、「高齢者の疾患と症状の基礎知識」、「認知症の理解、認知症のケア」、「介護現場における医療・健康管理」の項目が見てとれる。

つまり、この項目について、指導者・学生ともに、事前学習が必要であると認識した項目であると推測できる。また、実習後の学生においては、意欲的に学習を深め理解していかなければならない課題が、実習を通して明確にできた項目であるといえよう。

次に、指導者の回答は高いが、学生の回答の低い項目は、「福祉職員の職業倫理、サービス実践の基本原則」、「チームアプローチの必要性」、「嚥下機能に関する基礎知識」、「感染症の理解、予防の実際」、「守秘義務、個人情報保護」の項目が見てとれる。

この項目については、学生は、実習前においては漠然としか理解しておらず、その必要性を捉えにくい項目であったのではないかと推測できる。なかでも、「守秘義務、個人情報保護」は、予想に反して、学生で回答したものは誰もいない。この項目についての認識不足は、個人情報の漏洩が懸念される項目であり、実習前の指導等で、特に、重要視すべき項目であるといえる。

次に、指導者の回答が低い傾向にあるが、学生の回答が高い項目は、「ケアプラン(ケアマネジメント)」、「介護保険制度の理解」、「アセスメントの実際について」の項目が見てとれる。

この項目については、指導者と学生に、習得すべき視点にズレが生じているのではないかと推測できる。理由を考えるに、これらの項目については、指導者は、実習での学習というよりも、実習後、さらには、就業後の経験によって相当数の時間をかけて習得していく

べき項目と思われるが、これに対し学生は、本学での実習の中に、第3事例研究を課題としているが、その事例研究を進めていく中で、これらの項目の重要性に触れ感じた結果の表れではないかと推測できる。

以上のことから、指導者は、「福祉職員の職業倫理、サービス実践の基本原則」といったものを十分に理解し、介護現場の業務実践の特色である多職種協働による「チームアプローチの必要性」、さらには、「高齢者の疾患と症状の基礎知識」、「認知症の理解とケア」等を学び、実習に望んで欲しい点が明らかになった。

つまり、サービス実践の基本原則の上に立ち、高齢者の代表的疾患と症状の基礎を理解し、チームで仕事をするという介護現場の特殊性を理解することにより、円滑なサービス実践につながり、結果として介護サービス全体の質が向上するという、実践者ならではの経験から導かれた結果であろう。

また、先の、実習前の結果と比較すれば、指導者サイドは、実習前・後に大きな変化はなく、QOLを維持・向上するための個別援助に関する知識に視点が注がれている一方、学生は、「高齢者の疾患と症状の基礎知識」を学んでおきたかった者が増えている。

これは、「職業倫理やサービス実践の基本原則」をベースに柔軟に個別援助の組み立てのスキルアップを図るという、筆者らの学生に期待する成長イメージよりも、実習中に大勢の要介護者と接し、さまざまな既往歴と障害形態に加え、認知症等によるバーバルコミュニケーションの限界といった大きな現実の壁を前にした学生の生の声であろう。

2. 指導者：実習までに習得してもらいたい技術
 学 生：実習までに学んでおきたかった技術

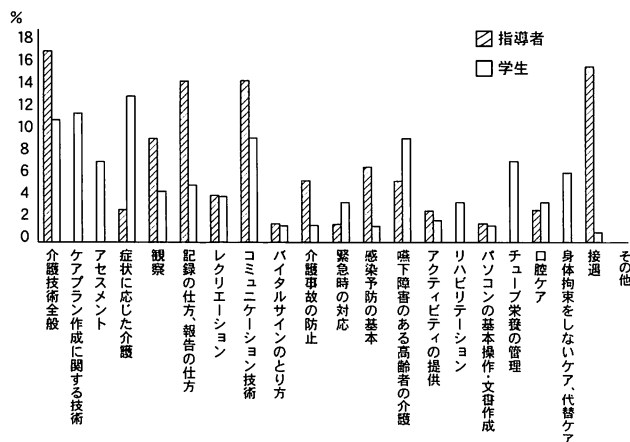


図 2

図2は、指導者「実習までに習得してもらいたい技術」、学生「実習までに学んでおきたかった技術」を比較したものである。

この結果について、指導者、学生ともに全体的にみて高い傾向にある項目は、「介護技術全般」、「コミュニケーション技術」、「嚥下障害のある高齢者の介護」が見てとれる。これらの項目は、介護を提供していくうえで根幹を成すものであるといえるが、根幹を成すがゆえに、その技術の習得には相当数の学習経験が必要であることから、実習を通してその大部分をこれらの項目のプログラムが用意され体験させている結果の表れであろう。

次に、指導者の回答は高いが、学生の回答の低い項目は、「接遇」、「記録の仕方、報告の仕方」、「コミュニケーション技術」、「観察」、「介護技術全般」、「感染予防の基本」、「介護事故の防止」が見てとれる。

これらの項目は、介護現場では、必要不可欠な技術とされる項目である。特に、「観察」は、誰にでもできるが、「観察」の持つ真の目的は、その時、その場で、要介護者に適した個別的な介護を提供する上で、必要不可欠の技術であり、その「観察」が的確に行うことができなければ、筆者らは専門職者とは呼べないと認識している。

これに加え、「記録の仕方、報告の仕方」についても、介護の提供場面において、記録なくして今後の介護展開に反映されないばかりか、報告を怠ることによって、「介護事故の防止」という観点からも多大なリスクを伴うことにもなりかねないし、「感染予防の基本」に関しても、しっかりとした技術を持って行わない限り、要介護者、介護提供者互いのリスクに繋がる。

また、この設問で、特に着目したい結果は、「接遇」は、指導者の結果とは大きくかけ離れ、実習前に学びたい技術にあげた学生は多かったが、実習を終えた段階では激減している。指導者と学生の視点のズレか、「接遇」の意味する観点の違いが生じた結果であると推測できる。

以上の結果から、指導者は主に、「介護技術全般」、「接遇」、「記録・報告」、「コミュニケーション技術」、「観察」等を、特に実習前までに習得してきてもらいたい項目としてあげている。特に、「接遇」、「コミュニケーション技術」は、円滑な人間関係の成立には不可欠なものであり、要介護者との関わりを持つ専門職者としては、コミュニケーションスキルの重要性を十分に認識しているといえる。

また、「接遇」については、指導者はサービスの質を構成する重要な要素であるし、組織人として、社会人として身につけて欲しい基本的スキルとして捉えており、最近の学生や若者と実際に関わってみて、より思いを強くしたものと推測のできる結果であろうが、この「接遇」を学んでおきたかったとする学生の少なさ

は予想外の結果であった。

これは、学生自ら接遇面について、なんら問題がないと感じている（高い自己評価）ということなのか、それとも、「接遇」を、専門職者に必要な介護技術として認識していないのかに疑問が残り、そこに指導者と大きな隔りがあるようである。

指導者は、学生の「接遇」について、さらに、質を高めて欲しい、実習の前段で身につけて欲しい基本的スキルと考えていると思われるが、顧客満足といった観点や、現任準備期間としての位置づけもある本学の養成過程としての筆者らの意向からしても、挨拶、表情、言葉遣いといった接遇力にかかる諸要素は、重要な介護専門職者としてのスキルであるといえる。学内での生活態度等にも着目し、育てていかなければならない視点であろう。

一方、学生は、「症状に応じた介護」、「ケアプラン作成の技術」、「介護技術全般」、「嚥下障害の高齢者の介護」等を学んでおきたかったと回答している。前述した「知識」同様、個別援助の基本と症状に応じた、より実践的な技術やケアマネジメント過程におけるサービス計画立案に関する技術をあげた学生が多いということは、重度化する要介護者医療依存度の高い利用者に対する専門的なサービス提供場面における気づきなのであろう。ケアプラン作成に関する講義・演習の時間数の確保を検討する必要がある。

3. 指導者：実習中、習得度の高いと思われた知識 学生：実習中、習得度の高いと思われた知識

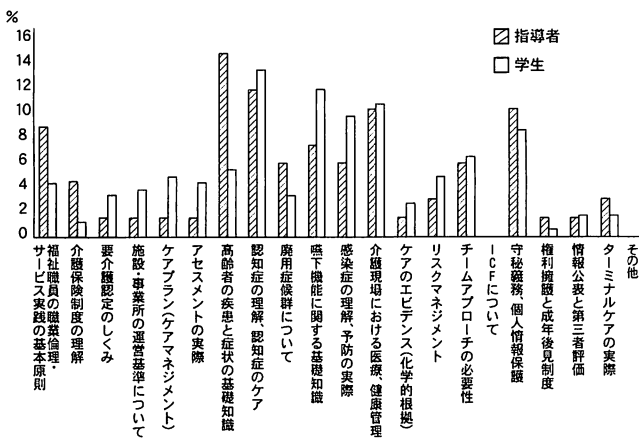


図3

図3は、指導者「実習中、習得度の高いと思われた知識」、学生「実習中、習得度の高いと思われた知識」を比較したものである。

まず、指導者からみて、習得度の高い項目は、「高齢者の疾患と症状の基礎知識」、「認知症の理解、認知症のケア」、「守秘義務、個人情報保護」、「介護現場にお

ける医療、健康管理」、「福祉職員の職業倫理、サービス実践の基本原則」等が高い結果に表れている。

一方、学生は、「認知症の理解、認知症のケア」、「嚥下機能に関する基礎知識」、「介護現場における医療、健康管理」、「感染症の理解、予防の実際」、「守秘義務、個人情報保護」等が上位を示している。

この結果について、指導者の意識としては、介護保険制度下で施設は運営され、その中で専門職者として働くために必要不可欠な制度理解、倫理、疾患等に対する基礎知識、または、人間観、障害者観といった視点に重点が置かれていることが伺える。

しかし、これとは別に、学生の結果が、「福祉職員の職業倫理、サービス提供の基本原則」、「介護保険制度の理解」、「廃用症候群について」等の項目が低いことからすると、介護保険制度そのものの理解が足りないか、利用者主体のケアプランの重要性へと繋がっているのかどうか、疑問が残る結果となっている。

また、「ICFについて」の項目には、指導者・学生ともに回答した者はいなかった。介護保険制度の改定や、ケアプランの中にICFの概念が導入されていることからすれば、より要介護者のニーズに沿った系統的な介護サービスが重要視されてくる。

今後、断片的な知識にとどまらず、広い視点で系統立てた知識の習得も要求されていく結果であると認識した。

以上のことから、指導者は、実習中習得度の高い知識として「高齢者の疾患・症状の基礎知識」をあげたが、同項目についての学生の解答は、予想に反し低かった。このことは実習中に習得していたと一定評価をください指導者が多くいる一方で、学生は、まだ理解が不十分であると認識しているということを示している。

また、「福祉職員の職業倫理、サービス提供の基本原則」について述べれば、筆者らは、職場環境（人間関係をも含む）の影響を、最も受けやすい項目であると感じている。言い換えれば、介護従事者は日々倫理的問題に直面し、この視点が未熟であればあるほど、職場環境は、良くも悪くも、容易に職務意識が変化していく恐れもあると考えられる。こうした点からすれば、直に要介護者に触れ、実習体験をした学生からすれば、もっとこの項目の重要性を感じとって欲しい項目であったといえる。

4. 指導者：実習中、習得度の高いと思われた技術 学生：実習中、習得度の高いと思われた技術

図4は、指導者「実習中、習得度の高いと思われた技術」、学生「実習中、習得度の高いと思われた技術」を

比較したものである。

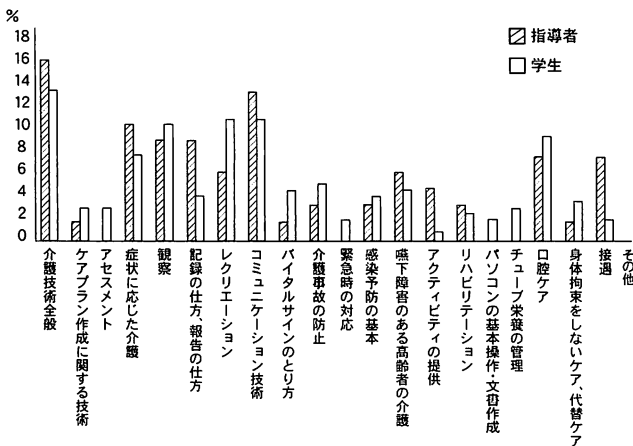


図 4

全体的に見ると、「介護技術全般」、「症状に応じた介護」、「観察」、「レクリエーション」、「コミュニケーション技術」、「口腔ケア」等については、指導者・学生双方とも、習得度は高いと回答している。

その中でも、指導者からみて、学生と比較して習得度に大きな差がみられる項目は、「記録の仕方、報告の仕方」、「アクティビティの提供」、「接遇」、「介護技術全般」、「症状に応じた介護」、逆に、学生からみて、指導者と比較して習得度に大きな差がみられる項目は、「バイタルサインのとり方」、「レクリエーション」、「観察」、「介護事故の防止」、「口腔ケア」が見てとれる。

この結果を推測するに、実際には体験していない項目も含まれていると思われるが、実習を通して、指導者からの指導・助言といったものから習得してきた部分と推測できる結果であるし、指導者から見て習得度の高いと感じている項目については、現場で働く上で身につけて欲しい項目を、各段階の実習プログラムにより多く体験できるように配慮がなされている表れであるともいえるし、そういった点に、介護福祉士の養成に携わる指導者自らが感じとって指導を行っているとも推測できる。

以上のことから、指導者・学生とも、「介護技術全般」を習得度が高かったとした者が多かったのは、実習そのものが、より実践的な介護技術の習得を第一義としていることからすれば当然の結果といえる。

また、「ケアプラン作成に関する技術」、「アセスメント」の両項目は両者とも習得度を感じている者は少なかったが、この項目を、実習開始前までに、もっと学んでおきたかった技術、実習でもっと習得したかった技術とする学生は一定数いることから、事前に学習して実習中に学びたかったが習得するまでにはいたらなかったと感じているということであろう。

施設におけるケアマネジメントの中心は、施設サー

ビス計画担当の介護支援専門員であるが、アセスメント、サービス計画の原案作りには介護職員が大きく関わっているし、多職種協働、サービス担当者会議の開催といった施設における日常的なマネジメント業務を考えると、指導者の立案する実習計画自体を再考する必要があるのではないだろうか。

5. 指導者：実習でもっと意欲的に習得して欲しい知識
 学生：実習でもっと意欲的に習得したかった知識

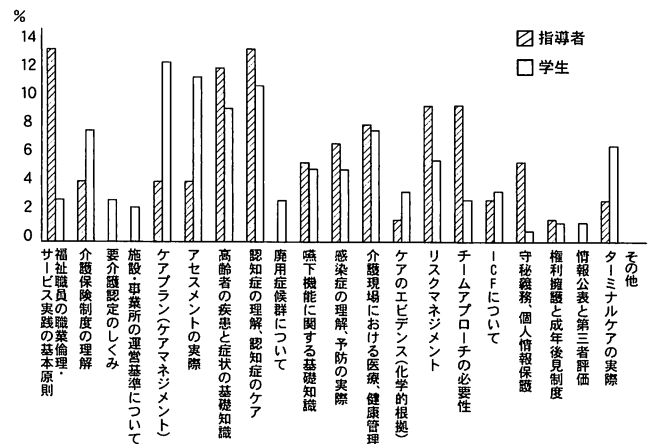


図 5

図5は、指導者「実習でもっと意欲的に習得して欲しい知識」、学生「実習でもっと意欲的に習得したかった知識」を比較したものである。

この問に関しては、指導者からすれば、今後、各学生に対して、専門職者としてもっと実習で期待したい項目及び、実習では、満足のいく習得までにはいなかった項目がこの結果として表れているのではないかと推測できる。

特に、「リスクマネジメント」と「ターミナルケア」については、要介護者の重度化等からも、特に重要視される項目であると思われる、今後、多くのターミナルケアを必要とする要介護者が増えてくると予測される中、高齢者・障害者に関する身体的特徴、または、医学的な基礎知識も重要な分野となってくる。こういった結びつきが、指導者からすれば、実習を通しては、学生にはまだ十分には認識されていないと感じとったことが、この結果に表れてきたのではないかと推測できる。

また、「守秘義務、個人情報保護」については、近年、個人情報保護という観点から、実習で習得を期待するものではなく、事前の講義等で、身近な話題を通して要介護者の人権という観点から理解を深めさせる必要性を感じるし、「福祉職員の職業倫理、サービス実践の基本原則」、「チームアプローチの必要性」については、

これらの理解を深めることで、より人間的な成長が望まれると考えられることから、実習中においてこれらの項目の理解を深め習得させるには、指導法の確立は非常に難しい項目であるとも推測できる。これらについては、いかに指導者がこれまで培ってきた経験を、学生に提供していくかが、習得への鍵を握っているのではないかと思える。

以上の観点から、この結果を分析すると、指導者は、「福祉職員の職業倫理・サービスの基本原則」、「チームアプローチの必要性」、「リスクマネジメント」等を、もっと意欲的に習得して欲しい項目としているが、学生は低かった。

これに加え、「認知症の理解・認知症のケア」、「高齢者の疾患と症状の基礎知識」等には、指導者・学生ともに、もっと意欲的に習得して欲しい、習得しなかった項目としていることが見てとれる。

また、学生は、「ケアプラン（ケアマネジメント）」、「アセスメントの実際」、「ターミナルケアの実際」、「介護保険制度のしくみ」等の項目をあげる学生が多かったが、同項目について回答した指導者は少なかった。

この結果から、指導者は、より実践的な技術習得よりも、その基礎となる人権尊重、人権擁護といった職業倫理、利用者主体のサービス提供といった基本原則が重要であるというスタンスが伺える。

介護保険施設では、身体拘束の実態把握、認知症のケア、虐待防止といった観点からの実地指導が行われている現在、介護技術、手技の習得といった実習の目的は理解するものの、もっと意欲的に、自らの職業倫理、サービス提供の基本原則について考えて欲しいとする指導者からのメッセージであるとも受けとれる結果であった。

6. 指導者：実習でもっと意欲的に習得して欲しい技術

学 生：実習でもっと意欲的に習得しなかった技術

図6は、指導者「実習でもっと意欲的に習得して欲しい技術」、学生「実習でもっと意欲的に習得しなかった技術」を比較したものである。

指導者の結果の高い項目については、指導者自らが経験して、介護福祉士として最低限は身につけて欲しい項目、及び、介護専門職者には必要不可欠の項目と認識している項目が、高い回答を得ていると推測できる。

指導者が、最も多く回答をした項目は、「コミュニケーション技術」であった。次いで、「介護技術全般」、

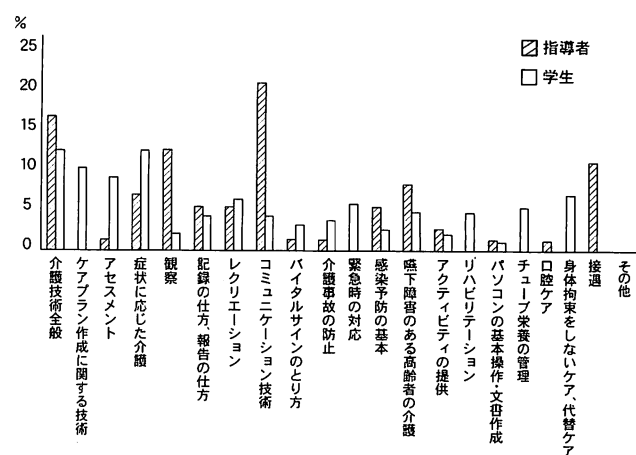


図6

「観察」、「接遇」、「嚥下障害のある高齢者の介護」と続いている。これに対し、学生が多く回答した項目を見ると、「介護技術全般」、「症状に応じた介護」が最も多く、次いで、「ケアプラン作成に関する技術」、「アセスメント」、「身体拘束をしないケア、代替ケア」、「レクリエーション」、「緊急時の対応」と続いている。

ここで着目したい点は、「コミュニケーション技術」をあげる指導者が多かったが、これに対し学生は、予想に反して少ない結果となっている。この結果を推測するに、ここでいう「コミュニケーション技術」は、コミュニケーション障害における意思疎通のためのテクニックだけでなく、介護の基本としてのコミュニケーションの重要性にあると思うが、単に会話ができるというような学生のコミュニケーションスキルの貧困を表しての結果ではないかと推測できる。

また、実習先の担当者や他のスタッフとの交流といった観点からのコミュニケーション能力として捉えて、学生自身はある程度のコミュニケーションはとれていたと認識した結果であると推測できる。

しかし、ここで求められるコミュニケーションとは、独立した対話、会話、意思疎通として存在しているのではなく、生活のあらゆる場面を通して、生活支援の基礎となるものであろうし、バーバルコミュニケーションだけでなく、雰囲気、気配、表情、空気といったものも、自己の介護の方法に取り入れようとする食欲さが学生には見受けられないのであろう。

以上のことから、これらの項目について、それぞれが回答した項目の割合を比較すると、「介護技術全般」を除き、いずれの項目も、指導者の回答した項目に比べ、学生は低い結果となっている興味深い結果が表れた。しかも、「接遇」については、学生が回答した者はいなかった。

また、他の項目を見ると、指導者は、実習で習得して欲しい項目がある程度は明確になっていると見てと

れるが、これに対して学生は、各項目に満遍なく分散していることが伺える。このことは、ある意味においては、習得すべき項目や内容に、学生は、縛りきれていなく、これまでの講義や各自の学習から得た情報をもとに、実習では体験や習得できなかった項目を中心に回答されていると推測できる。こういった点については、実習を通して広く満遍なく知識・技術を高め、今後の学習課題を明確にするという観点からすれば、その目的は達成されつつあるともいえるが、さらに、理解を深めさせていくためには、これらの指導者・学生のニーズの互換性を検討し、事前に、実習で習得すべき項目を明確にして実習に取り組みさせる必要性を感じさせる結果である。

- 7. 指導者：介護福祉士として、学生に身につけて欲しい資質
- 学 生：介護福祉士として、身につけなければならない資質

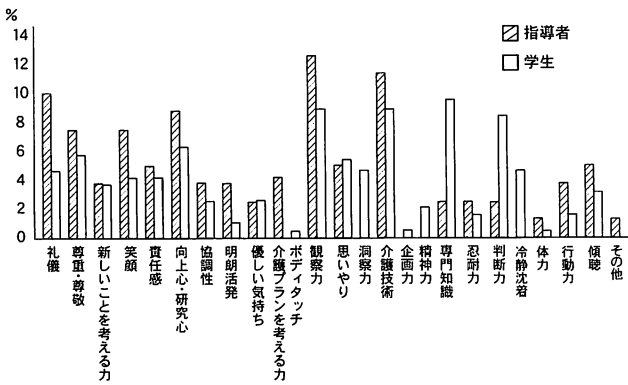


図 7

図 7 は、指導者「介護福祉士として、学生に身につけて欲しい資質」、学生「介護福祉士として、身につけなければならない資質」を比較したものである。

実習後の指導者と学生の介護における資質に対する意識について、まず、指導者は、「観察力」、「介護技術」、「礼儀」、「向上心・研究心」、「笑顔」、「尊重・尊敬」といった項目が高い回答を得ている。

これに対し学生は、「専門知識」、「観察力」、「介護技術」、「判断力」、「向上心・研究心」が高い回答にあると見てとれる。

この結果と、前回実施した、学生に対しての実習前にイメージしていた資質の結果と実習後の資質の変化について比較してみると図 8 のようになる。

実習前と比較し、回答に増加のあった項目を抜き出すと、「観察力」、「介護プランを考える力」、「冷静沈着」、「判断力」、「礼儀」、「洞察力」、「専門知識」、「新しいことを考える力」が見てとれる。この増加した項

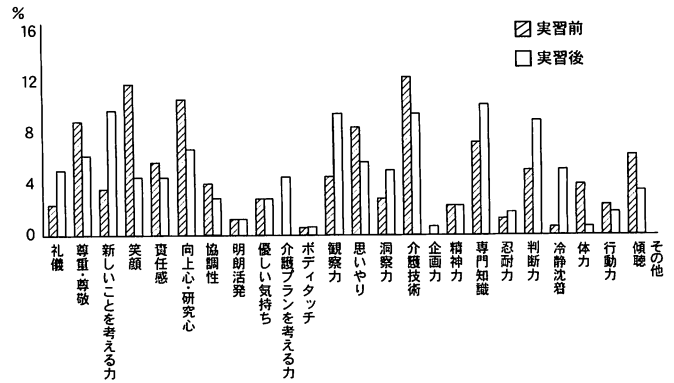


図 8

目については、学生が思い描いていた介護福祉士に必要な資質の理想像と、介護現場で自ら体験し、専門職者として就労している職員を目のあたりにし、感じとった介護福祉士に必要であると認識した資質であろうと推測できる。

また、図 7 で述べた指導者の回答で多かった「礼儀」を、実習前と比較し、学生がこの項目が増加してきているということは、「礼儀」の資質を重んじる現場を感じとり、漠然と介護を提供するのではなく、人間関係の基盤を重んじ介護を提供する者が、単に資格を取得すれば専門職者になれるのではなく、「礼儀」を資質とし専門性を発揮していくことに気がついた学生が多いことは、今後の各学生の将来といった点を考えれば、大きな収穫であったと考える。

逆に、実習前と比較し、回答に低下の見られた項目は、「笑顔」、「向上心・研究心」、「尊重・尊敬」、「体力」、「介護技術」、「傾聴」、「思いやり」、「責任感」、「協調性」が見てとれる。この結果は、学生が実習前に思い描いていた介護福祉士の理想像と、実際の介護福祉士の実像との相違が表れた結果であろうと推測できる。

特に、「笑顔」の項目については、実習前と実習後とでは、大幅な減少があったことが読みとれる。学生が実習前に思い描いていた「笑顔」は、実習を通して思い描いていたほど存在していなかったということも推測できる。しかし、指導者は「笑顔」を資質として回答している割合は高いという興味深い結果である。

この結果は、指導者側が求めるいわゆる介護の原点と、知識、技術などの「質」を求める学生と介護に対する資質について、指導者、学生それぞれの実習で求める認識の差が生じたのであろう。

確かに、介護の「質」に関しては、高齢社会において、介護保険制度も導入され、介護に対し混迷している現在においても大変重要な課題である。

しかし、その「質」も、何を持って質と考えるかといった点についても、まずは基本的な共通理解がないと必然的に表面上のものだけになってしまい、理想論

だけにとどまってしまう可能性も十分考えられる。本質的な人間理解を深めた上で、そうした「質」に関して介護者がどういった介護観、障害者観、人間観を持ちケアを行なうかは、重要な視点であると考えられる。

指導者も、もちろん介護の「質」については考え、実習の視点に入れながら実習、指導も進めていっているわけだが、それ以前に、学生の学習意欲、実習態度、生活態度、介護に対する倫理、人間性についても重視している様子が、巡回指導等でも伺える場面が多くなっている。質を高める努力には、さらに力を注がなければならないと痛感している。

以上のことから、指導者、学生ともに、実習前より、実習後にポイントが増えた項目は、「観察」であった。実習中のさまざまな場面で、学生の観察不足、気づき不足が目立つ結果であろう。観察の不備から、ニーズの適切なアセスメントができなかったり、記録が書けなかったり、的確な介護サービスが提供できなかったり、異常の早期発見ができなかったりと、観察力は介護スタッフとして重要なスキルであると筆者らは考えている。

能力のあるセンス良い介護スタッフは、整理された観察のポイント、観察の視点を身に付けているものであろう。相手をよく知ることとは、よく見ることなのである。予想に反し、指導者、学生ともに低い結果となって表れたが、「観察」と同様に、「傾聴」も質としては、重要なスキルであるということを、学生に伝えていかなければならない。

IV. 見えてきた介護実習の視点

今回の調査は、前回の調査、「介護実習の視点1」、「介護実習の視点2」に基づき、さらに具体的に指導者、学生がどのようなニーズを持っているのかを捉え、今後、実習指導の課題を明らかにしていく目的で行った。

そのため、前回の調査項目である「学んでほしい知識・技術」、「学びたい知識・技術」についてピックアップし、実習後、それぞれどのようなことを感じ、求めているか設問を通して具体的意識の調査を行った。そこで、見えてきた視点から、今後の課題等まとめることとする。

①指導者が考える「実習までに習得してもらいたい知識」で明らかになった視点

1) 指導者が、学生に求めるものは、個人の尊厳を守り（高齢者虐待防止、身体拘束禁止等）利用者本位の個別ケアを実践するために職業倫理・サービス実践の基本原則の理解や、利用者の重度化も含めた幅広い介護ニーズに対応する

ため「こころとからだ」の基本的な理解である。それらを介護の専門職者として最低限習得しておくべき基本的知識と考えている。

2) 介護現場では、多職種と協働しながら進めるチームケア、チームアプローチが重要であり、指導者はチームアプローチの必要性を学生が理解することを重要と考えている。チームアプローチの実際にあたって、コミュニケーション能力や情報の共有の観点から適切な記録ができる能力も重要となるが、このことが後述の「習得してもらいたい技術」の結果にも影響したものである。

②学生が考える「実習までに学んでおきたかった知識」で明らかになった視点

1) 学生の求めるニーズは、特に、「介護保険制度の理解」、「ケアプラン」、「アセスメント」といった介護過程の展開など、介護過程展開技術面でのニーズが高い傾向が見られた。これは、前稿の「介護実習の視点2」で行った実習前の調査とは、相反する結果となった。

実習前の調査では、「介護保険制度の理解」、「施設・事業所の運営基準について」、「ケアのエビデンス」、「守秘義務、個人情報保護」、「ターミナルケアの現状」等は低い結果として表れていたが、実習後、「介護保険制度の理解」などについての値が上昇した。

このことは、介護現場の最前線で実習する上で、制度の仕組み・法律の知識は介護実践には必要な知識であり、学生自身、これらの知識不足を痛感した結果であると推測される。

2) 「高齢者の疾患・症状の基礎知識」、「認知症の理解・ケア」を学んでおきたかった知識とする学生が多かったことは、利用者の重度化や認知症の増加、介護予防からターミナルケアまでの幅広い介護ニーズに対応している介護現場で実習することで、改めて実践の技術としての介護展開は医学や看護の知識、リハビリテーションの理解が重要であると認識したのであろう。

③実習指導者が考える、「実習までに習得してもらいたい技術」で明らかになった視点

1) 「介護技術全般」に対するニーズは高い結果となった。これは、実習の大きな目的が学習した知識・技術を用いて実際に介護を行い技術の確認を行うことであることから、当然の結果と考えられる一方で、実習に臨む際の学生が身に付けている介護技術水準の低さからくる指導者サイドの反応とも推測される。

また「症状に応じた介護」の項目が低いことから、「介護技術全般」を汎用可能な基礎的技術として捉えていることが伺える。

- 2) 「接遇」「コミュニケーション」を習得してもらいたい技術とした指導者が多かった。これは「習得してもらいたい知識」において、職業倫理・基本原則が有意に高かったという結果とも関係しているものと思われる。前稿、「介護実習の視点1」でも、「接遇」「コミュニケーション技術」については、対人援助の専門職者に欠かせない重要な視点と考えている指導者が多く見られたが、実習を通して習得してもらいたい技術として重要であるとの認識が深まったのであろう。介護福祉士には、利用者や家族と円滑なコミュニケーションが図れる能力が求められているし、チームケアを進める上でも同様であろう。より実践的な接遇スキル、コミュニケーション能力を高めるためのカリキュラムの必要性を示唆している。

④ 学生が考える「実習までに学んでおきたかった技術」で明らかになった視点

- 1) 指導者が、「接遇」に関して強い認識を示しているのに対し、学生の「接遇」に対する値は低かった。それは学生が自身の接遇スキルを意識することなく実習を終了したということ、あるいは具体的な接遇に関する指導を指導者から受けなかったということ、または、自己評価の高さからくるものと推測される。

そこに利用者の権利擁護、要援護者はサービスの消費者であるという視点の欠落が見てはとれないだろうか。

- 2) 「ケアプラン作成に関する技術」、「アセスメント」、「症状に応じた介護」など介護過程の展開方法などに関する項目が「学んでおきたかった知識」と連動して上位となった。ケアマネジメントの仕組みを踏まえた介護過程の展開や手法としてのケアマネジメントに対する興味を抱く学生が多いといえる。

重度化する利用者に対し適切なケアを総合的かつ効率的に提供するケアマネジメントの手法。その実践を経験することで、より実習前に理解を深めておきたかったと考えた結果であろう。

これらの結果から総合的に見て、360時間、8週間という限られた時間の中で当然のことではあるが、指導者側と、学生間では、双方求めるニーズが同じものもあれば、違ってくるものもある。

今回の調査は、学生全体と、施設指導者間での調査

となったが、個々人の意識の違いも当然出てくる。しかし、今回結果として表れた、双方の求めるニーズを把握し、施設と学校側の共通した認識や方針を持つためにも、施設現場での状況を把握し、また、今後より一層介護の「質」が問われるなか、知識・技術においても指導者、学生との綿密な情報交換、調整が今後の課題として考えられる。

さらに、学内での教育内容をより現場重視、実践的なものにシフトし、介護福祉士養成校が介護のエビデンスの蓄積に果たす役割も重要なものとなっているといえる。

V. 終わりに

これからますます高齢社会となる日本において、介護はますます必要とされてくる分野にある。前記したように、実際、介護現場で働く介護職員数は、平成12年の約55万人（うち介護福祉士約13万人）から平成17年の約112万人（うち介護福祉士約26万人）と約2倍になっており、最近では毎年10万人ずつ増加している。

しかし、現在の介護福祉士の登録者数は約54万人とといった中で、現場最前線で働く職員数である。また、介護職員に占める介護福祉士の割合は施設で4割、在宅で2割の推移をしている。^(註3)

このような情勢の中、介護福祉士の国家資格の取得ルートの見直しに加え、カリキュラムも大きく変わる。

今回の調査で浮き彫りになったように、介護福祉士養成部分に大きくかかわってくる実習現場での指導者の意識と、学ぶ学生の間には相違点も見られた。

これは、よく言われる「理想と現実が違う」といったことだけではすまされない、介護の「質」の部分に、今まさにメスが入れられようとしている。

今回得た結果を再度分析し、この相違点を調整し、よりよい養成課程を経て、即戦力のある「質」のいい介護福祉士を育てていくためには、指導者と、養成校との連携は欠かせない。また、学生に対する、事前の教育部分が重要なポイントとなってくるであろうし、現在の介護現場の実態を明確に伝えたいと、事前指導等を通して、実習のねらい・目的を明確にしていかなければならない。

介護職だけでなく、現代の若年層の早期離職率が大きな問題として取りざたされている。しかし、実際のところ現在ではマンパワー不足の中、介護の「質」に関してどう対応していくかが、介護現場はもちろん、介護福祉士養成校としても大きな課題である。

国家資格の重さ、取得後のスキルアップなど、対人援助のプロとしての介護福祉士としてのプライドを持ち続ける教育が、介護福祉士養成校、介護現場での重

要な視点となってくるといえよう。

この結果と報告が、各実習施設・機関にとって、各職員の意識の向上に役立てれば幸いである。

お忙しい中、この調査にご協力いただいた、本学専攻科福祉専攻介護実習施設・機関の実習指導者、並びに、本学専攻科福祉専攻平成18年度入学生に深く感謝いたします。

註

- 1) 羽陽学園短期大学紀要 第8巻 第1号(通巻27号) 2007年2月
 - 2) 同上
 - 3) 「介護福祉士制度及び社会福祉士制度のあり方に関する意見」平成18年12月12日厚生労働省社会保障審議会福祉部会より抜粋
《介護福祉士国家試験の概要》
- * 資格取得方法
- ① 養成施設ルート(2006年4月1日現在409校入学生定員27,105人)
 - ② 実務経験ルート
 - ③ 福祉系高校ルート
- * 形態
- ・ 年一回試験第1次試験(筆記試験)、第2次試験(実技試験)
 - ・ 筆記試験については1月下旬、実技試験については3月上旬に実施。なお、実技試験について、介護技術講習(介護福祉士養成施設において行う介護等に関する専門的技術についての講習)を修了したものに対して実技試験を免除する制度を2005年度(平成17年度)から導入。
2005年度(平成17年度)介護技術講習会修了者:約3.5万人
- * 試験の実施状況2006年(平成18年)実施の第18回試験結果

受験者数 約13.0万人

うち、実務経験 約12.1万人

福祉系高校 約0.9万人

合格者数 約6.1万人(合格率47%)

うち、実務経験 約5.6万人(合格率46%)

福祉系高校 約0.5万人(合格率55%)

* 介護福祉士の取得状況

・ 資格取得者数(累計) 約54.8万人

うち、養成施設ルート 約20.6万人

実務経験、福祉系高校ルート

約34.2万人

* 介護福祉士の任用・活用状況

・ 介護保険事業での介護職員に占める介護福祉士の割合

：施設サービス 約4割

：在宅サービス 約2割

* 今後のそれぞれの資格取得ルートの在り方

・ 養成施設ルートについては、養成課程における教育内容を充実した上で、養成施設卒業者は資格取得するために新たに国家試験を受験する仕組みとするべきである。

・ 保育士養成施設卒業者が養成施設等においては、現行の930時間の課程を1,155時間程度の課程にそれぞれ充実することとすべきである。

参考資料

日本介護福祉士養成施設協会会報「かいようきょう」
第29号 2007年1月20日

表1

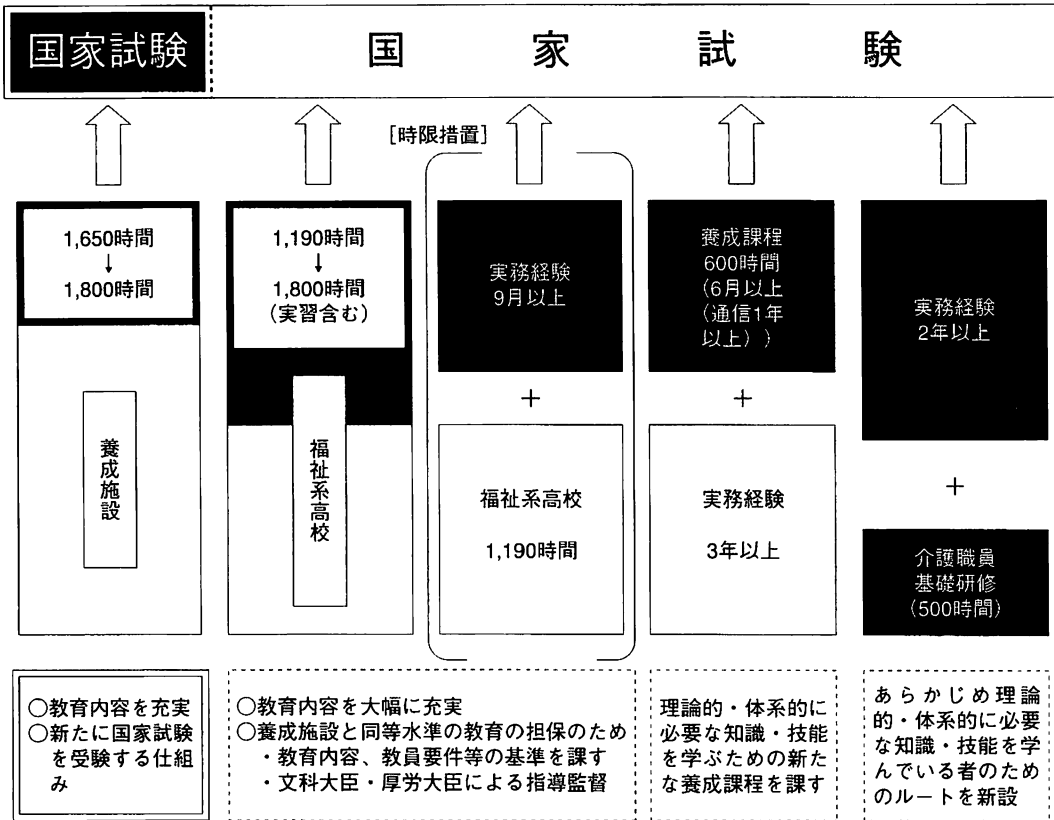
表2

別添資料 アンケート
(指導者用)

〈学生用〉

表 1

介護福祉士資格の取得方法の見直しの全体像



介護福祉士の教育カリキュラムの見直し

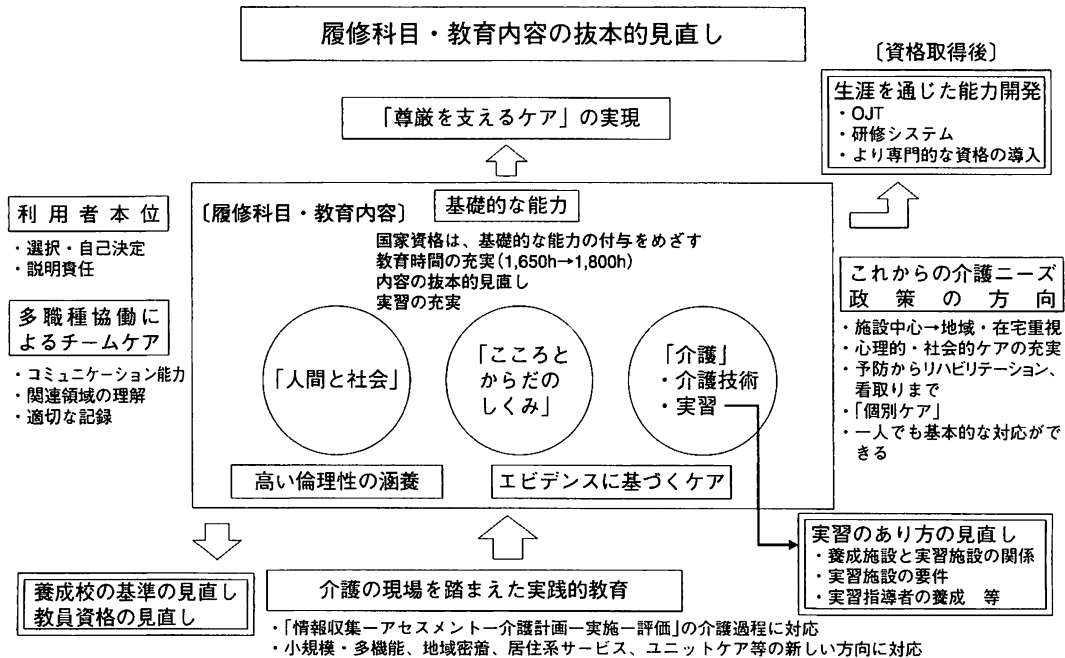


表2

[参考] 作業チームの「中間まとめ」における新カリキュラム案

新) 2年養成課程 1,800			新) 福祉系大学・社会福祉士養成施設等卒 1,080			新) 保育士養成施設等卒 1,155				
	科目	時間数		科目	時間数		科目	時間数		
人間と社会	人間の理解	人間の尊厳と自立 30以上	人間と社会	人間の理解		人間と社会	人間の理解			
		人間関係とコミュニケーション 30以上								
		小計 60以上			小計				小計	
	社会の理解	生活と福祉 15以上			社会の理解				社会の理解	
		社会保障制度総論 15以上								
		介護保険制度と障害者自立支援制度 15以上					介護保険制度と障害者自立支援制度 15			
		介護実践に関連する諸制度 15以上					小計 15			
		小計 60以上		小計			小計 15			
	※上記必修科目のほか、選択科目									
	小計	240		小計			小計	15		
介護	介護技術	介護概論 180	介護技術	介護概論 90	介護	介護概論 120				
		コミュニケーション技術 60		コミュニケーション技術 30		コミュニケーション技術 30				
		生活援助技術 300		生活援助技術 300		生活援助技術 300				
		介護過程 150		介護過程 50		介護過程 60				
		介護総合演習 120		介護総合演習 60		介護総合演習 60				
	小計 1,260	小計 930	小計 930							
実習	介護実習 450	実習	介護実習 360	実習	介護実習 360					
	小計	1,260		小計	930		小計	930		
のしくみ	発達と老化の理解 60	のしくみ	発達と老化の理解 30	のしくみ	発達と老化の理解 60					
	認知症の理解 60		認知症の理解 30		認知症の理解 60					
	障害の理解 60		障害の理解 30		障害の理解 30					
	こころとからだのしくみ 120		こころとからだのしくみ 60		こころとからだのしくみ 60					
	小計 300		小計 150		小計 210					
	合計 1,800		合計 1,080		合計 1,155					

福祉系大学・社会福祉士養成施設等卒業ルート
 保育士養成施設卒業ルート

新) 養成課程 6ヶ月 600			(参考) 介護職員基礎研修 500			
	科目	時間数		科目	時間数	
人間と社会	人間の理解	人間の尊厳と自立 15	人間と社会	生活支援の確立と介護における尊厳の理解	30	
		人間関係とコミュニケーション 15				
		小計 30				
	社会の理解	生活と福祉				
		社会保障制度総論 30			老人、障害者等が活用する制度及びサービスの理解	30
		介護保険制度と障害者自立支援制度				
		介護実践に関連する諸制度 30				
		小計 30		(小計)	60	
	小計	60				
介護	介護技術	介護概論 90	介護	介護職員の倫理と職務	30	
		コミュニケーション技術 30		介護におけるコミュニケーションと介護技術	90	
		生活援助技術 90		介護における社会福祉援助技術	30	
		介護過程 120		生活支援と家事援助技術	30	
	小計 330	生活支援のためのアセスメント計画		30		
実習			(小計)	210		
	小計	330		介護実習	140	
				(小計)	140	
のしくみ	発達と老化の理解 30	のしくみ	認知症の理解 30	のしくみ	認知症の理解 30	
	認知症の理解 30		老人、障害者等の疾病、障害等に関する理解 30			
	障害の理解 30		医療及び看護を提供する者との連携 30			
	こころとからだのしくみ 120		(小計) 90			
	小計 210		合計 500			
	合計 600		合計	500		

実務経験ルート

資料

(指導者用アンケート)

- 問Ⅰ、実習までに習得してもらいたい知識・技術は何ですか。(各5つ)
- 問Ⅱ、実習中、習得度の高いと思われた知識・技術は何ですか。(各5つ)
- 問Ⅲ、実習でもっと意欲的に習得して欲しい知識・技術は何ですか。(各5つ)
- 問Ⅳ、介護福祉士として、学生に身につけて欲しいと思われる資質は何ですか。(5つ)

(学生用アンケート)

- 問Ⅰ、実習までに学んでおきたかった知識・技術は何ですか。(各5つ)
- 問Ⅱ、実習中、習得度の高いと思われた知識・技術は何ですか。(各5つ)
- 問Ⅲ、実習でもっと意欲的に習得したかった技術・知識は何ですか。(各5つ)
- 問Ⅳ、介護福祉士として、身につけなければならない資質はなんですか。(5つに○をつけてください)

指導者・学生回答用紙は共通のものを使用した。

問Ⅰ Ⅱ Ⅲ 用

知識

	福祉職員の職業倫理、サービス実践の基本原則
	介護保険制度の理解
	要介護認定のしくみ
	施設・事業所の運営基準について
	ケアプラン(ケアマネジメント)
	アセスメントの実際について
	高齢者の疾患と症状の基礎知識
	認知症の理解、認知症のケア
	廃用症候群について
	嚥下機能に関する基礎知識
	感染症の理解、予防の実際
	介護現場における医療、健康管理
	ケアのエビデンス(科学的根拠)
	リスクマネジメント(事故の予防と介護事故発生時の対応・苦情解決)
	チームアプローチの必要性
	ICFについて
	守秘義務、個人情報保護
	権利擁護と成年後見制度
	情報公表と第三者評価
	ターミナルケアの現状
その他	

技術

	介護技術全般
	ケアプラン作成に関する技術
	アセスメント
	症状に応じた介護(褥創、脱水、発熱、下痢、嘔吐等)
	観察
	記録の仕方、報告の仕方
	レクリエーション
	コミュニケーション技術
	バイタルサインのとり方
	介護事故の防止
	緊急時の対応
	感染予防の基本
	嚥下障害のある高齢者の介護
	アクティビティの提供
	リハビリテーション
	パソコンの基本操作・文書作成
	チューブ栄養の管理(胃ろう、P-TEG、経鼻経管栄養)
	口腔ケア
	身体拘束をしないケア、代替ケア
	接遇
その他	

問Ⅳ 資質

- 1、礼儀 2、尊重・尊敬 3、新しいことを考える力 4、笑顔 5、責任感
- 6、向上心・研究心 7、協調性 8、明朗活発 9、優しい気持ち 10、介護プランを考える力
- 11、ボディタッチ 12、観察力 13、思いやり 14、洞察力 15、介護技術 16、企画力
- 17、精神力 18、専門知識 19、忍耐力 20、判断力 21、冷静沈着 22、体力 23、行動力
- 24、傾聴 25、その他()

SUMMARY

Mizuki MATSUDA,
Takatoshi ARAKI,
Yoshihiro SAKURAI,
Motoshi SATO:

Perspectives on Practical Care Training 3
—From the Questionnaire Survey after Practical Care Training—

An attitude survey has been conducted on both supervisor and student who completed practical care work training. The purpose of this survey was to show the changes of their awareness and clarify an issue by comparing with the results obtained from 「Perspectives on practical care training 1」 and 「Perspectives on practical care training 2」.

This study made clear following points:

- 1) Most of senior workers strongly encourage students to acquire minimum requirements for nursing-care work such as ethics, basic attitude in human services, understanding of major diseases, in addition to the basic knowledge and skills as a professional care worker. Also, they want students to develop their vision of nursing care, and their view toward disabled people.
- 2) Students consider they should have learn developing methods of care process such as care planning, assessment and understandings about long-term care insurance system through practical care training in spite of students have been not recognized the importance of those things before training. This result assumed to be due to the students keenly felt the need the developing methods of care process, and felt the importance of long-term care insurance system.
- 3) Overall skills in nursing care are much needed for both students and their supervisors.
- 4) However the caring manner is emphasized as an essential skill for care worker by practical training supervisors, most of student's understanding about importance of it was insufficient.
- 5) Teachers of training schools should correctly perceive reality of care worker institutions, and it is a task of pressing need to enhance the partnerships with those institutions to meet increasing demands for the quality of nursing care. Also building a more effective teaching program is a critical issue for training schools.

(M.MATSUDA and T.ARAKI ; Uyo Gakuen College,Advanced Course
Y.SAKURAI ; Part-Time Lecturer, Uyo Gakuen College
M.SATO ; Completion Student of Advanced Courses, Uyo Gakuen College)